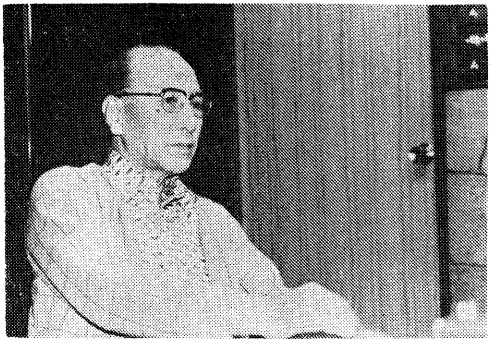


渡辺　茂

★対談★

子どもの中からうたを

きき手　村田修子

渡辺茂先生は公立及び国立の小学校の教諭、校長を経て、現在東京学芸大学講師（付属小金井小学校）、私立弥生幼稚園（東京・世田谷）の園長でいらっしゃいます。数多くのうたの中で「たき火」「ふしぎなポケット」などの作曲は、皆様よくご存知のことと思います。

最近は、特に幼児のための作詩作曲をなさっておいでになる先生を、お茶の水女子大学附属幼稚園の村田修子先生に訪ねていただきました。

お二人は作曲と作詩で何度かコンビを組んでいらっしゃる間柄であり、またゴルフ仲間でもあるとか、録音の準備をする間もなく、さっそくお話は始まってしまいました。

対談の最後に、村田先生が子どもの中から見つけられた言葉をお出しになると、フンフンフン……と十分程考えていらした渡辺先生は、後載のような素晴らしい歌に仕上げてくださいました。

子どもの中からうたを

村田　先生はどんどんすてきな歌をお作りになるんですね。

渡辺　それは簡単にチョロチョロと出るものじゃなく、どういうものを作ろうかという、とっかかりに苦労しますね。っていうのは、今まで随分いろんなものを作っちゃったでしょう。単に叙情的なものとか叙景的なもの……歌唱曲としての曲は、もうあきあきしちゃっているのね、私は。最近は、作業歌でもいい、何か自分で歌いながら何かをやって育っていく、親も子も、大人も何か一緒にやりながら覚えていく、自然に理解していく、そういうような歌を作りたいって、だんだん目標がつまってきたんです。

春の空に白い綿雲が浮かんできれいだな、雲雀が鳴いて……というような歌よりも、もっともっと、具体的なものを作りたいですね。

村田　やっぱりそれは、子どもをよけいに知ったからで

しょうか。

渡辺　そうかもしれませんね。叙情的、叙景的な歌は、もう沢山あるし、そういうのは他の作曲家にまかせておけばいいっていう気持ちなんです、今は。子どもとこうして長い間生活してくるとね、子どもと直接に結びついた歌、歌っていてそれで何かが育つとか、技術を覚えたり、知識を積み重ねていったり、といったようなものが、作りたくなってきますね。

村田　そうですね。私も子どもといて、本当に必要な歌がほしいし、作りたいなあと思いますね。

渡辺　要するに現場で直ちに必要とする「直接の歌」ね、ウーン。先生たちは本当に直接子どもとのつながりがあるけど、僕なんかは、子どもと生活しているとはいっても、担任がいたりで、ワンクッションあるわけよ。そうすると本当の子どもの姿をつかむチャンスは割合少ないんですよ。担任だったらいやおうなしに保育時間中はピッタリですからね、子どもとは。ところが私はそうじゃない。ちょっと距離があるわけですから……。

村田　子どもって文章として歌になったことをいうわけではないんですが、我々がこうだと既成概念で思っていることを、全然そうじゃない言葉で言ってくれることがあるんですね。例えば、本で「とびうお」の話を読んでいたら、「あ、それじゃあ水の上を飛べるんなら、とびうおはトンボサカナなのね」って言ってくれるんです。それを、「ア、ナルホド」と思って書きとめておくんです。子どもは一度しか言ってくれませんから、そこでつかまえなくてはだめなんです。

渡辺　いいなあ。そういうチャンスが多いから、担任は。だから僕は一度担任やってみたいなとよく思うんですよ。

村田　保父さんっていうのが、このごろあるんですよ、ぜひなさったら（笑い）。

渡辺　いまさら体力的に続かないしね。

そういう点では、あなた方は素晴らしいチャンスをつかむ可能性が多い。こっちはある程度、想像になっちゃうわけ、クッションがあるからね。

トンボサカナなんて言葉は、まことに面白いね。ただその言葉だけでも面白いと思うけど、その前後の子どもの状態を考えてみたら、さらにこれを生かした言葉をくっつけて、すぐ詩ができる。村田先生ならそれができる

わけです。僕は話をきいて面白いなあと思うけど、そのあとは想像ですから、実感は割合少ないんですよね。

村田　じゃあ、私はとても幸せな立場にいるんですね（笑い）。

渡辺　本当にそうなんですよ。そういう目で担任をみていたら、担任は本当に幸せだと私は思いますね。

　こんな歌があったら面白いかな、こんなのは役に立つかなって、空で考えていくようなことは随分やってきたわけね。例えば、アイウエオのことで何かやってみたり、右左のこと、東西南北のこと、暑いとか寒いとか、あまい、にがい、すっぱいなんていう味のこととか、大きい小さいとか、ふくらむちぢむとか。子どもの日常生活の中でのいろいろな場面をとらえて、そこから何か作りだしていこうと思うんだけどね。最近はもう種切れ。年のせいかな（笑い）。子どもの中にはあるんだろうけど、つかむきっかけが非常に少なくなっちゃった。

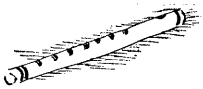
　そういう点でね、今みたいな、トンボサカナっていうような話をきくことが、私の喜びになるんです。

村田　本当にハッとすることがありますね。それがね、忙しいでしょ。その時に書いておかないと、何かあったなあとあとでいくら思い出そうとしても、自分で考えたことじゃないから思い出せないんですよね。おしいなあと思います。その子どもにきいてみても、全然だめでしょ（笑い）。

渡辺　それだめね、ウンウン、たしかにそうだね。その時の直感でパッというだけだからね。

村田　だからなるべくポケットのある洋服を……先生の「ふしぎなポケット」じゃないけど……いつも着てね、小さな紙とエンピツを入れてるんですよ。

渡辺　それはいいね。音楽の面からだけじゃなくて、あらゆる面からパッとひらめいたこと、気のついたことをね。それは、どの先生にもぜひやってもらいたいものだ。



子どもの中へうたを

渡辺　そんなことで歌を作ってたのしみにしているんだけどね。実際にそれを子どもの場にぶつけてみるチャンスは、幼稚園にいるんだからありそうなものなんだけど、意外にないんですね。担任にどいてもらって、さあやろうってわけにはなかなかいかないでしょ。やっぱり保育の中でその歌が出て来る必然性があって、またその歌の流れが続いていくっていうふうであってほしいわけでしょ。例えば「みぎみぎひだり」の歌だって、右はこっち、左はこっちというんじゃなくて、そこに来るまでの流れがある。そしてその歌があって、その歌を覚えることによってそれからまたあとの生活がね、右左を覚えた生活が少しずつ出て来る。そう考えるとね、担任を通してやってもらうよりしょうがないということになるわけ。いささか、靴の上からかいているみたいで、なんとも……。

私は今学芸大学の付属小金井小学校で、音楽の授業を持っているんです、一年生の。その時にある程度使ってはみるんですがね、小学校は教科書もあるし、もちろん私の曲ばかりやるわけにはいかないしね。ま、そういう意味では、さっき言ったように、担任になりたいなあと思いますよね。保父さんでしたっけ（笑い）。ただ体力は続かないな（笑い）。できれば一時間位時間をもらってやっても面白いかもしれないな。

村田　私のクラスに来てやっていただきたいわね（笑い）。

自分がいろいろな歌を知っていれば、その歌をやる方向に持っていくこともできますね。例えば、乗物の話とか交通安全の話になったときに、「みぎみぎひだり」の歌に持っていけるわけですよね。

渡辺　そうなんだ。こっちにはそれができないから、いらだたしさがあるわけ。頭の中の引出しには自分の作ったものがいろいろつめ込んであるからね。いつでも取り

出せる用意はしてあるんだけど、取り出すきっかけがないんだよね。

村田　私たちなんか、引出しあけたら空っぽだっていう時が多くて（笑い）。何かここであればいいなあって思うんですけど。おしいですね。

あのうたのことこのうたのこと

渡辺　「はいこんにちは」を作った時のことですけどね、園長室からボカーッと子どもを見ていたら、子どもたちが鉄棒をやっていたんです。クルッとまわれた喜びを表現しながら、子ども同士で遊んでいるのをみてると、クルクルまわって、ひょっと顔が出て来てこんにちは……ってね。ア、そうか、これを歌にしてみようかってね、ひょっとしたきっかけでできるんですね。ちょっときっかけがあると、それからそれへ発展していって、面白くなってくるんですよ。

村田　きょう、その歌、私の組で歌ったんです。すべり台でぶつかって、ちょっと傷したんですね。大したことはなかったんで、一応冷やしてから、皆が集まった時にね、〝おすべりスルスルすべってハイこんにちは〟って、こういうすべり方すればよかったのにねって話して、みんなでこの歌を歌ったんですよ。

渡辺　ウーンなるほどね。

村田　前に先生に作っていただいた「のはらでごごろ」っていうの、あれなんかも、遠足に行ったらたいていいつも歌えるんですよ。

渡辺　あ、あれはいいね。

渡辺　子どもが会話の中で〝ウン〟という言葉をよく使う。気になってしょうがないからね、「〝ウン〟という子はくさいんだ」って言うとね、始めはキョトンとしていて、そのうちにわかってきてね、ワーッと笑い出すんだ。そこで「ウンという子はくさい」をメロディーにしたんです。お友だちや仲間に言う時は〝ウンそうだよ〟

って言ってもいいけど、先生や親には〝ウン〟なんていうお返事はだめなお返事だ。だから「ウンという子はくさい、ハイっていう子はいいかんじ」……なんてね。

村田　なるほど……（笑い）。

うちの組でね、「みぎみぎひだり」を歌っていたんですよ。そしたらあのあとのね、ウンパ、ウンパ、っていう所ね、そこが面白くて、調子に乗って、アンパン、アンパン……って（笑い）。

渡辺　そういうのはいいね。アンパンがでたとはおもしろい。ウンパウンパじゃなくていいんだもの。要するに、あと打ちの感じがつかめることが大切なんでね。ウンパなんて言葉自体はどうでも良いんだからね。僕も大部やったけど、アンパンは出て来なかったなあ（笑い）。

村田　このごろの子どもは、いろんな音を聴きなれているから、不協和音だとか、そういう面白い響きのする音が好きですね。先生の「でもなかないよ」で、ふざけっこしていたらチャンチャンっていう音ありますでしょ、ドミファラの和音でしたか、あの音なんか大好きですね。押し間違えちゃって、きれいな音で弾くと、なんとなく物足りなそうな顔するの（笑い）。

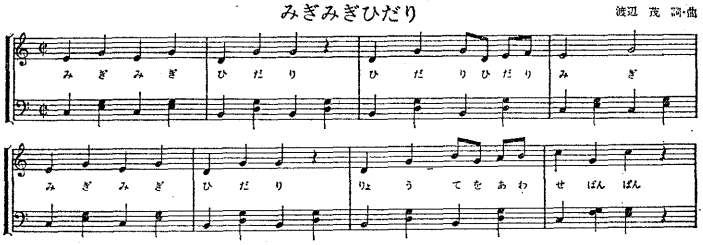
それに、本当にふざけっこしていてぶつかって泣きそうなった子に歌ってあげたりすると、泣くのなんかはずかしくなっちゃって、ニヤッと笑ってね。

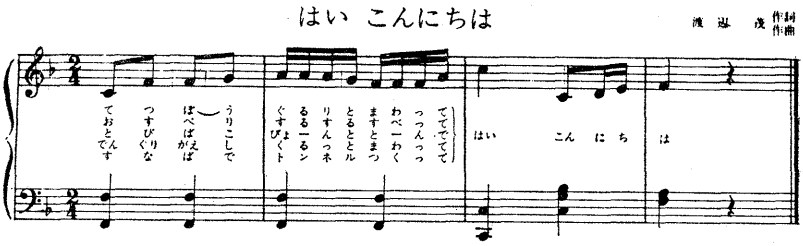
先生のお作りになった歌っていうのは、その場面場面で使えるんです。そういう、本当に生活の中ですぐ、先生が覚えていて歌ってあげられるような歌をもっと沢山知っていたらいいな、自分でもできたらいいなと思うんですけど。

渡辺　村田先生なんかは音楽的な理解もおありだし、作るチャンスも我々よりずっと多いんだから、できるはずですよ。おおいに作ってもらいたいと思いますね。

村田　どうぞ、また助けてくださいませ（笑い）。

渡辺　「あっちこっちどっちそっち」なんて歌も作ったんですよ。あっち、こっち、どっち、そっち、それだけの歌なんですよね。こうした代名詞を日常生活の中にながしていきたい、そういうねらいで作ったんです。リズミカルに身体を動かしながら遊んだら面白いと思う。だから従来のポエジーを持った詩を書く人がみたら、これは単なる言葉を並べたにすぎないので、詩ではないというだろうけど、ポエジーがあろうがなかろうが、それと





は関係なく、楽しい歌を作りたいね。

村田 「そっち」の前の一拍休みのリズムが面白いですよね。先生はあっちとかそっちとかいうのをお教えになりたいという意図もちょっとはおありになるように思われるんですけど。

渡辺 うん、まあそれだけじゃあないけどね。

村田 私なんかだったら、リズムと語呂がとてもいいでしょ、そっちの方を主に取りたいような感じがします。歌っているうちに自然に先生のねらいがわかってくる……。

渡辺 新しい角度から切り込んでいって、いい歌、面白い歌を沢山作りたいなあと思うんですけどね。

作詞の戸塚一郎、高すすむ、野中十三夫はすべて渡辺茂先生のペンネームです。なお楽譜の中で東とありますのは高の誤りですので、お詫びして訂正いたします。（編集部）

（JASRAC承認第520109号）

のはらでごろごろ

むらた みちこ 作詞
渡 辺 茂 作曲

♩= 84 ぐらい

1. みどりの はっぱ ちくちく するけれど 1,2.ころころ ころがる いいきも ちワーイ
2. ちゃいろの はっぱ がさがさ するけれど

ウン という子

戸塚一郎 作詞
渡辺 茂 作曲

ウン という子は くさい ハイッ ていう子は いいかんじ

でもなかないよ

東 すすむ 作詞
渡 辺 茂 作曲

ふざけっこしていたら じゃつんどぶつかって おひさまにぶつかっ
すりむいた でもなかないよいたいけど

あっち こっち どっち そっち

野中 十三夫 詞
渡辺 茂 曲

あっちこっちどっち そっち あっちこっちどっち そっち
あれこれどれ それ あれこれどれ それ

あっちこっちどっちそっち あっちこっちどっちそっち あっちこっちどっち そっち
あれこれどれそれ あれこれどれそれ あれこれどれ それ

自然な曲のながれを

村田　私は楽器が得意じゃないんですけど、先生のはちゃんと手がいきやすい所へいくように、伴奏がついているんです。あれ、不思議ですね（笑い）。

渡辺　私、自分があまり弾けないから、自分が弾けるようにしか書かない（笑い）。ソナチネ位でやる手のくせがついているんだ、私は。それに作ったものはやっぱり使ってもらいたいでしょ。だから作る時の態度としては、楽譜はできるだけ簡単に、っていうのね。あとの演奏の仕方は先生たちが考えて自由に表現したらいい。僕の気持ちとしてはね、楽譜はなるべく単純にして、目からの抵抗をなくそうと思ってね。二段楽譜で、いろいろとうっとうしい記号などほとんど書かない。それでいて使い方でいくらでも使えるんだってことです。

結局教師が「弾くこと」に懸命になっちゃってはどうしようもないからね。弾きながら他にすることが沢山あるんだもの。その方に心が向けられるようにするには、最小限の左手のなめらかさ、シンプルさを考えなければ。だから、僕の曲の調子なんかはCかFかG位しかない。たまたまシャープ二つとかフラット三つ位のがちょっと出て来るけど。私の場合だったら、その楽譜に書いてあるのは、その調子で歌わなきゃならないなんてあまりやかましく考えないんですよ。どうでもいいんです。「たき火」はCになっているんですけど、最初Dで作ったんです。Dで歌った方がずっと軽やかで明るい感じがして気持ちがいいんです。声の出る人だったらEsで歌ってもいい。Cで書いてあるのは、楽譜が読みやすいからです。半音あげてシャープ七つもついていたら、たいていの人が、見ただけでアーイヤダ、ダメダこんなもの、って……ポイでしょ（笑い）。

村田　〝ねこふんじゃった〟っていうアレ、譜を見るとウェーッてなりますね（笑い）。

渡辺　私自身そうだもの。楽譜を見て、シャープやフラ

ットがいっぱいあったり、休符やスラーやスタッカートや、記号がべったり出て来ると、ダメダメなんて敬遠しちゃう。

村田　私にとっては弾きやすいものを作ってくださる有難い先生ですわ（笑い）。

渡辺　バカにしたって思う先生もいるかもしれないけどね（笑い）。くり返すけれど、教師には弾きながらやることがたくさんあるんだものね。さっき自然に手が動くっておっしゃったけど、一般的に弾く動きっていうのは、大体きまっていると思うんですよね。だからそういう表現をすれば弾きやすいし、弾きやすいってことになれば使いやすいことになる。そうすりゃあ子どもの歌う度合いも多くなるしね。いろんな意味で目的を達する一つの方法です。

他の音楽家がみて、「なんだあいつは、これしか能力がないのか」なんて思われたって、一向にさしつかえない。最近こんな悟りみたいなものが出て来たのね。そういう年齢になって来たかな。だからバイエルに出て来るような簡単な伴奏でどんどん発表しちゃうんです。私自身はそれに対して抵抗なくできる。年齢からくる図々しさもありますね。気楽に二段楽譜でチョコチョコとやれるようになってきてね。その点私は、いわゆる世の先生方のためになっているんだっていう自負もあるんですよアハ、、、、。

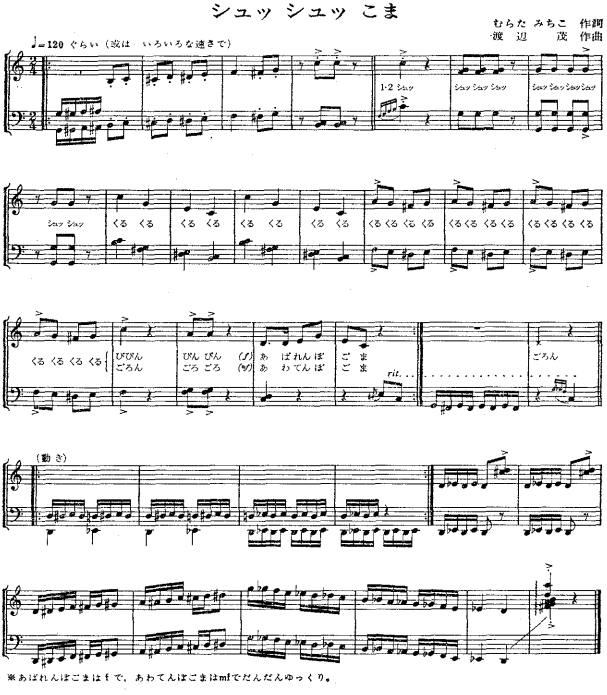
子どもの中からみつけた言葉で

村田　これ、子どもにもらった言葉なんです。（紙片をさしだされる）コマをまわしていました時にね、ゴロンと早くたおれてしまったコマを見て、「あ、あわてんぼゴマだ」と子どもがいうんです。ピンピンとはねているコマを見て、「あれは、あばれんぼゴマだね」って。アワテンボゴマ、アバレンボゴマっていう言葉が面白くてね。言葉としてはそれだけなんですけど、アワテンボゴマがまわるクルクルっていう音と、たおれるゴロンとい

う音、アバレンボゴマはシュッシュッとまわってピンピンととぶ。こんなんで何か歌ができますかしらね。

渡辺　フンフン……フンフン。なんとかやってみましょう。これもハ長調でね（笑い）。

（了）



※あばれんぼごまはfで、あわてんぼごまはmfでだんだんゆっくり。

幼児の教育　第七十六巻第六号

六月号　© 定価二〇〇円

昭和五十二年五月二十五日　印刷

昭和五十二年六月一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。